

# 学習規律の徹底と ICT の有効活用を土台とした

## 授業実践の広まりと深まりの要因

久川慶貴（春日井市立出川小学校）・水谷年孝（春日井市立出川小学校）  
佐藤和紀（常葉大学）・高橋純（東京学芸大学）・堀田龍也（東北大学）

概要：本校は平成 23 年度から、「学習規律の徹底」「ICT の有効活用」を土台とした授業実践に取り組んでいる。その後、7 年が経過し、多くの教職員が入れ替わった現在でも、学習規律の徹底、ICT の有効活用を土台とした授業実践は初任者や転任者にも広まっており、確実に継続されている。さらに、授業においてタブレット PC を活用するなど、新たな手立てを取り入れ、深まりも見せている。このように、教員やその年齢構成も大きく変わっていく中、こうした授業実践が広まりや深まりを見せている要因を明らかにするために、本校の教員にアンケートを実施した。その結果、実践の広まりの要因は、日々の学年内の情報共有であり、指導案検討、サブ授業、事後協議会なども含めた情報共有が重要であることも明らかとなった。また、実践の深まりの要因は、学年内の情報共有に加えて、研究部会や研究授業をはじめとした学年間の情報共有も重要であるという示唆も得られた。

キーワード：学習規律、ICT 活用、校内研究、研究授業

### 1 はじめに

本校は平成 19 年に開校した学校である。平成 23 年度から「みんなで思考・判断・表現し合える子の育成～確実な習得と、伝え合う活動・学び合う活動を通して～」というテーマのもと授業実践に取り組んでいる。その土台となるのが、「学習規律の徹底」「ICT の有効活用」である（春日井市立出川小学校(2015)、清水(2016)）。

「学習規律の徹底」とは、授業や学校生活における最低限のルールを定め、学校全体で統一し、徹底することである。本校では「学習に向かうための心構え」ととらえている。例えば、学習面では、机上の学習用具を置く場所、ノート書き方、発言の仕方などである。生活面では、机の横に掛ける物、ロッカーへのランドセルの入れ方など、多岐にわたる。

「ICT の有効活用」とは、実物投影機やプロジェクター、ノート PC を全教室に常設し、日常的に活用することである。堀田ほか(2013)は、実

物投影機が教室に常設され、1 日 1 回以上活用している小学校教員を対象に、実物投影機の活用効果の実感について調査した。その結果、教師にとって ICT 活用は多くの効果があり、特に、説明などの理解の促進が最も高く、次に準備の手間の軽減、説明などの時間短縮の順であることを明らかにした。このような先行研究を元にして、本校では「ICT の有効活用」を授業実践の重要な柱としている。

本校は現在、経験豊富な教員の割合が減り、少経験者の割合が増加している。そのような状況でも、学習規律を徹底し、ICT を有効活用した実践が継続されている。また、タブレット PC（以下、TPC と呼ぶ）を活用したり、伝え合いや学び合いを意識して、「話す・聞く・書く・読む」力の育成を目指したりしている。今後も教員の入れ替わりが続く中、授業実践を広めたり深めたりし続けられるかどうかは不透明である。そのため、本校におけるどの取り組みが、授業実

践の広まりや深まりの重要な要因となっているのかを明らかにする必要がある。

本研究における授業実践の「広まり」とは、初任者や少経験者、転任者に、出川小学校の学習規律・ICTの有効活用を土台に「わかる」「できる」授業を行うという考えが伝わることとする。「深まり」とは、学習規律やICTの有効活用を土台に、TPCの活用を始めたり、伝え合いや学び合いを意識して、「話す・聞く・書く・読む」力の育成を目指したりすることとする。

本研究では、1)本校の実践の広まりや深まりを目指した取り組みについてまとめる。2)教員へのアンケート調査を通して、それらの取り組みが、実践の広まりや深まりにどの程度重要な要因となるのかを明らかにすることを研究の目的とする。

## 2 本校における授業実践の広まりや深まりを目指した取り組み

実践の広まりや深まりを目指した取り組みを以下に示す。

### ・ 学年での情報共有

本校では、学級でのルール・システムなどの大枠について情報共有が確実に行われている。特に、授業の進め方や評価などについては頻繁に行われる。これにより、クラス間で指導の差が出ないようにしたり、初任者や少経験者、転任者に本校の実践を伝えたりしている。

### ・ 公開校内研・研究授業

本校は、校内研を公開するという形で多くの研究授業を外部に公開している(以下、公開校内研と呼ぶ)。また、高学年・中学年・低学年ブロックに分かれて校内向けに研究授業も行っている(以下、ブロック研と呼ぶ)。さらに、これらの研究授業に向けて、学年で指導案検討をし、他クラスで予備授業(以下、サブ授業と呼ぶ)も随時行っている。なお、授業後にも協議会を開き、手立ての効果などについて、事後検討を行っている。また、公開校内研では講師を招き、実践への価値づけをしていただいている。

### ・ 研究部会

本校には、指導案の形式、学習活動の定義付けなど、学校全体で共有すべき内容を検討する部会がある。各部会では、TPCやICTの使用場面や指導案の検討、指導案や児童のノート、板書記録の蓄積などを行っている。検討した内容は、管理職・各主任・学年主任・各研究部の部長から成る研究推進部会でさらに検討を経た上で学校全体へ提案される仕組みとなっている。

## 3 調査

### (1) 調査対象および調査時期

アンケート調査を行う対象は、本校で授業を主に受け持つ常勤の教員(27名)とする。調査時期は、平成29年7月下旬である。

### (2) 調査方法

#### ① 授業実践の価値に対するイメージの調査

実践の価値に対するイメージの変容を調べるため、教員に対して、1)本校に着任する前(実践開始前から勤務する教員は、実践開始直後)の実践の価値に対するイメージ、2)現在の実践の価値に対するイメージについての調査を実施した。回答は、4件法によるアンケートで求め、「価値ある実践・研究だ」を4点、「おそらく価値のあるものだろう」を3点、「余りよくわからない」を2点、「わからない」を1点として平均値と標準偏差を算出した。さらに、「着任前(実践開始前)と現在のイメージの変容」を要因とした1要因参加者間による分散分析を実施した。

さらに、こうした定量的な検討だけでなく、現在の実践に対するイメージについての自由記述を参照し、教員のイメージの変容を検討した。

#### ② 授業実践の広まり・深まりの要因となる取り組みの重要度の調査

実践の広まり・深まりに向けた取り組みが、どの程度重要であるかを明らかにするために、調査を実施した。質問項目は、金ほか(2015)を参考に作成した。実践の広まりの要因となる取り組み13件(2で示した取り組みを細分化し

たもの、表1「質問項目」の項目を作成した。回答は、5件法によるアンケートで求め、「とても重要」を5点、「重要」を4点、「少し重要」を3点、「あまり重要でない」を2点、「重要でない」を1点として平均と標準偏差を算出した。実践の深まりについても同様に実施した。

さらに、こうした定量的な検討だけでなく、広まりや深まりの要因についての自由記述を参照し、取り組みの重要度を検討した。

## 4 結果

### (1) 実践の価値に対するイメージの変容

実践開始直後（新任者・転任者は着任前）の実践の価値に対するイメージの平均値は 2.22（標準偏差 0.99）、現在のものは 3.56（標準偏差 0.57）となり、平均値に有意差が認められた（ $(F(1, 52))=35.32, p<.01$ ）。

また、現在の実践に対するイメージの自由記述の内容を分析すると、以下のようにまとめることができた。（N=27）

- ・ 子どもが落ち着いたという変容から、大きな効果を実感した（7人）
- ・ 授業をスムーズに行うことができる（5人）
- ・ 実践を続けて、そのよさがわかった（5人）
- ・ 学校全体で取り組むことによって、効果をあげている。（4人）

このように、実践後の児童の変容から、効果やよさを実感している記述が多く見られた。

### (2) 実践の広まり・深まりの要因となる取り組みの重要度の検討

アンケート調査の結果を表1に示す。

質問項目 (取り組みの種類)	重要度 (広まり)		重要度 (深まり)	
	平均 値	標準 偏差	平均 値	標準 偏差
(1) 学年での情報共有(授業など)	4.85	0.45	4.63	0.62
(2) 学年での情報共有(規律など)	4.52	0.83	4.37	0.78
(3) ブロック研に向けた指導案検討	4.41	0.56	4.33	0.72
(4) ブロック研に向けたサブ授業	4.15	0.7	4.04	0.64

(5) ブロック研後の協議会	4.15	0.8	4.04	0.84
(6) 公開校内研に向けた指導案検討	4.33	0.54	4.26	0.64
(7) 公開校内研に向けたサブ授業	4.15	0.7	3.93	0.6
(8) 公開校内研に向けた模擬授業	4.07	0.72	3.85	0.76
(9) 公開校内研後の協議会	4.19	0.9	3.96	0.88
(10) 公開校内研後の講師による講演	4.15	0.7	4.26	0.64
(11) 研究部会（検討部・ICT・TPC部など）	3.85	0.76	4.22	0.79
(12) 研究推進部会	3.67	0.94	4.04	0.79
(13) 外部研修への参加	3.41	0.83	3.89	0.79

表1 取り組みの重要度

各質問項目における重要度の平均値は、全ての項目で中間値の3を上回った。したがって、これらの取り組みは、実践の広まりや深まりにおいてどれも重要度が高いことが示された。

重要度の上位3件太枠で囲み、下位3件に色付けをした。

実践の広まりについて、重要度が高いもの(表1の太枠部分)は、順に「(1)学年での情報共有(授業など)」「(2)学年での情報共有(規律など)」「(3)ブロック研に向けた指導案検討」であった。重要度が低いものは、順に「(13)外部研修への参加」「(12)研究推進部会」「(11)研究部会(検討部・ICT・TPC部など)」であった。

実践の深まりについて、重要度が高いもの(表1の色付きセル)は、順に「(1)学年での情報共有(授業など)」「(2)学年での情報共有(規律など)」「(3)ブロック研に向けた指導案検討」であった。重要度が低いものは、順に「公開校内研に向けた模擬授業」「(13)外部研修への参加」「(9)公開校内研後の協議会」であった。

また、自由記述の内容を分析すると、以下のようにまとめることができた。（N=27）

<広まりについて>

- ・ 学年内での情報共有が大切（12人）
- ・ 指導案検討で他者の意見を得られる（8人）
- ・ ブロック研やサブ授業で授業を見合うことが大切（5人）
- ・ 研究授業後の協議会で多くを学べる（4人）
- ・ 講師による価値づけが大切（4人）

<深まりについて>

- ・ 学年内での情報共有が大切 (11人)
- ・ 研究部会で実践について話し合うことが大切 (10人)
- ・ 講師の先生のお話や、外部研修で普段学べないことを知ることが大切 (8人)
- ・ ブロック研や校内研など、学年間での情報共有が大切 (8人)
- ・ ブロック研やサブ授業で授業を見合うことが大切 (4人)

このように、広まり、深まりについてどちらも、学年内や、学年間の情報共有が大切だとする記述が多くみられた。

また、「学年での日頃の授業に関する情報や進め方の共有があり、ブロック研や校内研に向けた検討で詳しく知り、サブ授業で実際にどうということなのかが見てわかるため、それぞれが重要。順に詳しくわかって広まっていく。最後に講演を聞いて、学年の先生が話していたことの意味がつながって、理解が深まる。」という記述があった。このように、実践を行うにはどの取り組みも重要であるが、その一連の流れが広まりや深まりの要因となるという示唆も得られた。

## 5 考察

教員へのアンケート調査より、どの取り組みも重要度は高く、中でも、実践の広まりの要因となる取り組みは、日々の学年での情報共有であると考えられる。また、その次に重要なものは、学年での指導案検討である。これらはどちらも学年団を中心に行われるものであるため、実践の広まりに関する重要な取り組みは、学年での情報共有や研究授業に向けた指導案検討などだと考えられる。

深まりについては、広まりと概ね同様の傾向が見られる。しかし、(11)と(12)の研究部会の重要性が高いという結果から、研究部会は実践の深まりの要因として重要だと考えられる。このことから、深めることについて、学年内の情報共有も重要であるが、さらに、学校全体での

研究部会をはじめとした学年間の情報共有や検討の機会も要因となる取り組みと考えられる。

## 6 結論

本稿では、授業実践が広まりや深まりを見せている要因を調査した。実践の広まりの要因となる重要な取り組みは、学年内での情報共有である。また、指導案検討、サブ授業、事後協議会なども含めた情報共有が重要であることもアンケート調査の分析によって明らかとなった。

実践の深まりの要因となる取り組みは、学年内の情報共有に加え、研究部会や研究授業などの学年間の情報共有が重要であると考えられる。

## 7 今後の課題

本年度異動してきた教員にとっては、3ヶ月の経験しかない状況でのアンケート調査であるため、本年度の3月に再度調査する必要がある。

また、本校から他校へ異動した教員から見た本校の授業実践の広まりや深まりに対する意識も調査し、実践を市内の学校へ広める際の示唆を得られるよう調査を続けていきたい。

## 参考文献

- 堀田龍也, 高橋純, 山田愛弥, 八木澤圭 (2013) 小学校教員が実感している実物投影機の活用効果に関する分析. 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 153-156
- 春日井市教育委員会・春日井市立出川小学校 (2015). 学習規律の徹底と ICT の有効活用～わかりやすい授業の実現をめざして～. 教育同人社.
- 金俊次, 堀田龍也 (2015) 若手教員とベテラン教員の協働による校内 OJT モデルの実践. 全日本教育工学研究協議会, 第 41 回全国大会, 350-353
- 清水康敬 (2016) One to One への道 1人1台タブレット PC 活用の効果測定と教育委員会・学校の挑戦～「ワンダースクール応援プロジェクト」成果報告書～. 教育同人社.